

『死に神が馬車を導く』から『黒の過程』まで-マルグリット・ユルスナール『黒の過程』研究-

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 美緒 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10291/11684 |

『死に神が馬車を導く』から『黒の過程』まで

—マルグリット・ユルスナール『黒の過程』研究—

De *La Mort conduit l'attelage* à *L'Œuvre au noir*

博士後期課程 仏文学専攻 1991年度入学

中 村 美 緒

MIO NAKAMURA

序

ユルスナール Marguerite Yourcenar 1903-86の作品『黒の過程』*L'Œuvre au noir*, Gallimard, 1968には、『死に神が馬車を導く』*La mort conduit l'attelage*, Grasset, 1934という前作品がある。この作品の中におけるゼノン Zénon の物語——後の『黒の過程』——は、三章の中の一つを占めており「デューラー風に」*Après Dürer* と名付けられている。これは、著者ユルスナールの創作の跡を辿る手掛かりとして大変興味深い作品と言える。作者の希望により現在は絶版となっているという事実からも、この作品は『黒の過程』の前作品であって、本作品の成立後には消滅することになったということが分かるというものである。この著者には、「若年のころから作者が長い時間をかけてそれらの人物とつきあうことの利点¹⁾」という言葉もあり、このことから、ユルスナールと主人公ゼノンがこれら二作品の間に共に成長した過程をたどるのは、作者を知るために有効な手段であると思われる。

I. 『死に神が馬車を導く』について

ユルスナールにとってのこの作品は、「若書きの作品」であり、到底満足の行くものではなかった様である。作品自体は1933年²⁾に発表されたもので、三章で構成されている。そのそれぞれの章は、「デューラー風に」*Après Dürer* 「エル・グレコ風に」*Après Greco* 「レンブラント風に」*Après Rembrandt* という題がつけられており、一人の主人公を中心にその周辺の様々な人々を描いたものである。先にも述べた「デューラー風に」は、十六世紀の錬金術師ゼノンの生まれからその死に至るまでの物語であり、「エル・グレコ風に」は、後に『姉アンナ…』*Anna, soror…*, Gallimard, 1981として生

まれ変わる作品であり、さらにその後には、『流れる水のように』 *Comme l'eau qui coule*, Gallimard, 1981-82の中の一章となった作品である。「レンブラント風に」は、これもまた後に『流れる水のように』の中で「無名の男」 *Un homme obscur* と「美しい朝」 *Une belle matinée* の二章に分離したナタナエル Nathanaël を主人公にした作品で、原稿段階では「ナタナエル」³⁾と題されていたものだ。この三つの章のタイトルは、「すくなくとも見せかけだけの統一性だけは与えたいと考えて」⁴⁾つけられたが、読者から「ゼノンの物語はドイツ的と言うよりむしろフランドル的ではないか」⁵⁾という意見が寄せられて、ユルスナールを驚かせた。またこの作品は、初めユルスナールが意図したように⁶⁾、大河小説的なものにはならず、内容的にも三章が一緒にされることにより効果が表れたとは思われにくい。これは、一枚の銅貨に纏わる人々を描いた『夢の貨幣』 *Denier du rêve*, Grasset, 1934などに見られる緻密な構成とは趣を異にするものである。したがってこの論文内でもこれらのタイトルは、『死に神が馬車を導く』と『黒の過程』を識別するためにだけ用いることとする。

ところで、この「デュラー風に」は70ページ程⁷⁾の長さであり、主人公ゼノン Zénon と従兄弟アンリ＝マクシミリアン Henri-Maximilien が出会うところから始まり、最後はゼノンの死で終わるといふ『黒の過程』と同じ構成をしている。

II. あらすじ

ラシャ商人アンリ＝ジュスト Henri-Juste Ligre の一人息子であったアンリ＝マクシミリアン Henri-Maximilien は、何不自由ない将来を約束されていたにも係わらず、家を捨ててパリに向かって歩を進めながら、流浪の生活を送っている。先を行く巡礼に声を掛けると、それは行方が分からなくなっていた従兄弟のゼノン Zénon だった。お互いの身の上話をしたあとで、一方は狭い道に他方は広い道へと別れていく。ゼノンはアンリ＝ジュストの妹イルゾンド Hilzonde と聖職者アルデリコ・デ・ヌミ Alderico de'Numi のあいだに生まれた私生児で、恋人に捨てられた母親から疎まれていた。ある日アンリ＝ジュストが連れてきた新しい客シモン・アドリアンセン Simon Adriansen は、信心深い人物で、その様子を哀れみ、毎年尋ねてくるようになる。アルペリコ・デ・ヌミがローマで殺されたという報せが伝わると、彼はイルゾンドを自分の家へ連れていく。ゼノンはシモンに慣れなかったので、聖職者になるべく伯父の家で養育されることになる。視察にやって来たマルグリット妃 Marguerite d'Angoulême が家に逗留することになった歓迎の饗宴の席に、職人たちが給料の改善を求めて乱入してきたのに対してゼノンが冷淡な態度を取ったため、自動織機を発明して職人の仕事を取り上げたとして糾弾される。そのあげくに無神論者であると非難された彼は、彼を慕うウィヴィーヌ Vivine に別れを告げたあとで町を立ち去る。一方、母イルゾンドと義父シモンは、次々と子供をなくしたあとで二人の女の子に恵まれた。シモンはヤン・マチエス Jan Mathijs の下に人々が暮らす中にイルゾンドを一人置いて取引のために出発するが、その間にイルゾンドは二人の娘——ドロテ Dorothée とマルタ Martha——を残して処刑されてしまう。この二人の娘はシモンの妹サロメ Salomé の嫁ぎ先であるフッゲルス家 les Fuggers に預けられ、仲良く育つ。1551年イタリアに始ま

ったベストは猛威を振るい、ついにサロメとドロテを襲った。宿屋で決闘のために傷を負ったアンリの手当てをしたのは、消息の知れなかったゼノンであった。マルタはドロテの夫となるはずだったフランソワ François と結婚し、二人の娘と一人の息子をもうけた。が、マルタが出席している偶像破壊の集会の現場に踏み込んできたのは、息子のヴァンサン Vincent であった。ブリュージュの教会に対する罪を犯した者たちの中にゼノンの名前を見つけた教会参事バルトロメ・カンパヌス Bartholomée Campanus は、火刑前にゼノンに会って救おうとするが、かえってそれが教会に逆らうことになる。ゼノンに論されて諦める。処刑の朝、自害しているゼノンを見つけた人々は、これを重大な罪であると判断してその死体を薪の上に立たせて火刑に処した。バルトロメ・カンパヌスは彼の書類を持ち帰って旧友とともにそれを燃やし、その傍らではウィウィーンが給仕をしていた。

この「デューラー風に」のあらすじは、『黒の過程』と比較すると酷似していることが分かる。全体のページ数から言うと、前者は後者の約四分の一なので、細かいエピソードや心理描写などには前者に見られなかった要素も含まれているが、次にあげる『黒の過程』の目次を見ると両者がほぼ同じ構造であるのが分かる。

『黒の過程』の目次

I. LA VIE ERRANT 放浪

Le grand chemin 大街道

Les enfances de Zénon ゼノンの幼年時代

Les loisirs de l'été 夏の閑暇

La fête à Dranoutre ドラヌートルの饗宴

Le départ de Bruges ブリュージュを去る

La voix publique 世間の噂

La mort à Münster ミュンスターにおける死

Les Fuggers de Cologne ケルンのフッゲルス家の人びと

La conversation à Innsbruck インズブルックでの会話

La carrière d'Henri-Maximilien アンリ＝マクシミリアンの経歴

Les derniers voyages de Zénon ゼノンの最後の旅

II. LA VIE IMMOBILE 蟄居

Le retour à Bruges ブリュージュに帰る

L'Abîme 深淵

La maladie du prieur 僧院長の病気

Les désordres de la chair 肉の惑い

La promenade sur la dune 砂丘の散歩

La souricière 罠

Ⅲ. LA PRISON 牢獄

L'Acte d'accusation 告発状

Une belle demeure 美邸

La visite du chanoine 教会参事の訪問

La fin de Zénon ゼノンの最期

Une douzaine de pages tout au plus sur les cinquante d'autrefois subsistent modifiées et comme émiettées dans le long roman d'aujourd'hui, mais l'affabulation qui mène Zénon de sa naissance illégitime à Bruges à sa mort dans une geôle de cette même ville est dans ses grandes lignes demeurée telle quelle.

(Note de l'auteur, *L'Œuvre au noir*, p. 838)

かつての五十ページのうち、今日の長編小説にも残されているのはせいぜい十二ページ分ぐらいで、それも、修正され細分された形で残っているにすぎないが、ブリューシュにおける私生児ゼノンの誕生から、同じ町の牢獄で彼が生を終えるまでの話は、その大筋においてもそのままである。

(『黒の過程』、岩崎力訳、白水社、p. 388)

この著者による指摘からも、二作品の間に差がないことが分かる。

Ⅲ. 二作品の違い

ところで、一方の『黒の過程』が約290ページの長さであることから、「デュラー風に」に書き加えられた部分はかなり多いということが分かる。単純に計算して、『黒の過程』の四分の三は書き加えられた部分だということになる。従ってここでは、まず、この二作品の差異を検討して行きたい。

先にあげた「デュラー風に」と『黒の過程』の目次を見ると、確かにほとんどのエピソードが重複している。しかし、『黒の過程』の中に出てくる、後のゼノンの逮捕の主な原因となる若い修道士シプリアン Cyprien の行った「天使の集い」⁸⁾とその結果としての少女の妊娠と出産——これは主に「肉の惑い」から「告発状」までの章に描かれているのだが——が見られない。そのために、ゼノンの逮捕の必然性が薄くなってしまっている。『黒の過程』では、シプリアンの誘いをかわしたにもかかわらず、打ち明け話を聞かされていたゼノンは、少女が神に背くことを恐れて儀式のことを告白した際に、シプリアンによって共犯者にされてしまう。かつて無神論者だと噂されていたこと、名前を偽って⁹⁾ブリューシュに帰っていたことなどもあって、異端審問にかけられて死刑を宣告されてしまうのである。

Il fut appréhendé le jour suivant. Cyprien, pour s'éviter la torture, avait avoué tout ce qu'on lui

demandait, et bien davantage. (...) Quant à Zénon, les témoignages du jeune moine étaient de nature à le perdre; le médecin, à l'en croire, aurait dès le début été le confident et le complice des Anges.

(*L'Œuvre au noir*, pp. 779-780)

彼はその翌日逮捕された。シプリアンが、拷問を逃れるために尋ねられたこと全部に答えたばかりか、あらぬことまでしゃべったのだった。(…)ゼノンについて言えば、若い修道士の証言は彼を破滅に陥れずにはおかない性質のものであった。つまり、彼の言によれば、医師はそもそものはじめから天使たちの腹心であり共犯者だというのであった。

(『黒の過程』、岩崎力訳、白水社、p. 311)

さらにここで見逃せないのは、このエピソードによってゼノンの人間らしさを読者が強く感じ取ることが出来るという点である。誘惑に負けそうになったり、シプリアンをそれとなく論さなければと機会を窺ったり、この集会の主催者であるフロリアン修道士 Florian を遠ざけようとしたりするところなどは、「デューラー風に」には見られない部分であろう。この辺りにも、作者と主人公が同時に成長した跡が見受けられる。

Le lendemain, dans la nuit du vendredi au samedi, le philosophe travaillait parmi ses livres quand un objet léger tomba travers la fenêtre ouverte. C'était une bague de coudrier. (...) Zénon revint tremblant s'asseoir à sa table. Un violent désir s'était emparé de lui, auquel il savait d'avance qu'il ne céderait pas, comme dans d'autres cas, en dépit d'une résistance pourtant plus forte, on sait d'avance qu'on s'abandonnera.

(*L'Œuvre au noir*, p. 744)

翌日、金曜から土曜にかけての夜、哲学者が蔵書にかこまれて仕事していたとき、開いた窓からなにか軽いものが投げこまれて床に落ちた。それは榛の細い棒だった。(…)ゼノンは身体をうちふるわせながらテーブルに戻って腰をおろした。激しい欲望が彼を襲ったが、他の場合のようにそれに打ち負かされることはないのをあらかじめ彼は知っていた、というのも、より強い抵抗力を必要としていたにもかかわらず、もしそれに負ければ自己を放棄することになるのがあらかじめわかっていたからである。

(『黒の過程』、岩崎力訳、白水社、pp. 262-3)

さらに決定的に違うのは、ゼノンの死の場面である。「デューラー風に」では、翌朝ゼノンが自殺しているのを獄吏が発見して知らせると、人々は彼の死体を無理に薪のうえに立たせて火刑に処すのである。が、『黒の過程』では、以前他のところでも指摘したように¹⁰⁾、自殺するまでのゼノンの心理

描写や行動に多くのページが割かれており、主人公が自殺した時点で物語は終わっている。さらに、そのときの描写の仕方が、前者が事件記事のように事実だけを淡々と述べているのに対して、後者はゼノンと同じ視点で書かれているので読者はその場に居あわせたかのような錯覚に陥るようになってくる。

Le matin de l'exécution, on apprit que Zénon, trompant la surveillance des gens d'église, s'était poignardé dans sa prison, et cette dernière révolte contre la loi fut sévèrement jugée. (...) On l'attacha au bûcher pour qu'il se tint debout, et le mort fut brûlé avec les vivants.

(*La mort conduit l'attelage*, p. 81)

処刑の執り行われる朝、人々は、ゼノンが教会の監視の目を盗んで監獄の中で自殺しているのを見つけた。この最後の抵抗は厳しく罰せられなければいけなかった。(…) 人々は彼の体をまっすぐ立つように薪の山にくくりつけ、生きた罪人たちとともに火刑に処したのだった。

D'autre part, et placée pour ainsi dire en repli derrière la résolution de mourir, il en était une autre, plus secrète, et qu'il avait soigneusement cachée au chanoine, celle de mourir de sa propre main.

(*L'Œuvre au noir*, p. 827)

他方、いわば死の決心のかげに折り込まれた形で、もうひとつの、より秘められた、教会参事には細心に隠してあかそうとしなかった決意があった。みずからの手で命を絶とうという決意であった。

(『黒の過程』、岩崎力訳、白水社、p. 377)

以上見てきたように、34年の年月¹¹⁾は作者と作品の成長にこのように作用している。では次に、この二作品に共通して流れるユルスナールの意識というものを探ってみよう。

Ⅳ. 二作品の共通点

ここまでは、作者ユルスナールの「主人公とともに成長する」という言葉に沿って、「デューラー風に」から『黒の過程』への変遷を追ってきた。しかし、これらの作品には根底に同じ物の見方が流れているに違いない。この観点に立ってユルスナールのテーマは何かを見て行こう。

ユルスナールにはこの『黒の過程』の他に『ハドリアヌス帝の回想』*Mémoires d'Hadrien*, Plon, 1951という作品がある。この作品の根底にあるのは、事物を科学の目で冷静に捕らえてゆく態度である。主人公のローマ皇帝ハドリアヌスは、死の瞬間をも「目を見開いて」¹²⁾迎えようとする。これは自殺したゼノンとは一見正反対の態度に見えるが、ゼノンの自殺も実はバルトロメ・カンパナスに説得されて宗旨がえをするくらいなら、自殺によって自分の主張に責任を持つとした表れなのであ

る。ここで扱った「デューラー風に」にもまた同じ思想の萌芽が見られる。牢獄に尋ねてきて彼の命を救おうとして改心を勧めるバルトロメ・カンパヌスに、ゼノンは次のように言う。

Je ne crois pas en Dieu, et je n'ai point d'orgueil. Il faudrait que les philosophes, à leur tour, s'ingénient à faire volupté de la seule chose inévitable.

(Après Dürer, *La mort conduit l'attelage*, p. 80)

私は神を信用していないが、けっして思い上がっているわけではない。哲学者というものは、直面している事物に喜びを見出す努力をしなければならないものなのだ。

この姿勢は、ユルスナール作品の主人公にのみ見出される特徴なのではなく、作者自身もまた、科学や理性を重視した人である。前出の「目を見開いて」というハドリヤヌスの最期の言葉からとったタイトルをつけた作品があるが¹³⁾、ここでも自身のことを語りながら決して感傷に走らない冷静な著者の姿を見ることが出来る。

V. 主人公とともに成長すると

ユルスナール作品には初出の作品に手を加えて再版されるものが多い。このことから作者は厳格な文章マニアのように思われるむきがある。実際、作者は「著者は著者なりに、判定者よりも厳しい目で自分の著作を見る理由をもっているものだ」¹⁴⁾とて弁明しているが、また一方では、「私が偏執狂的に全てを書き直し、書き変えることに時間を費やしていると信じこんでいる人々、(…)あまりにも性急な判断を下す人々に、あらかじめ答えておくためでしかないとしても(…)」¹⁵⁾として、作品の再版が必然のものであったことを強調しながら自作解説を書いている。恐らくこの両方が作者ユルスナールの資質を表すものであろう。作者が成長しそれとともに主人公が成長してしまうと、以前に発表された作品の余白の部分——作品に現れていない主人公の生活——が大きくなりすぎて、自分の作品に厳しい作者にとっては以前の作品は書き足りなくて偽物のように感じられてしまうに違いない。今回の「デューラー風に」から『黒の過程』への移行を検討しても、やはりそのことが感じられる。連続する事件の描写でしかなかった「デューラー風に」は主人公の心理が詳しく書き込まれ、エピソードのつながりも必然的で明確な『黒の過程』へと変化したのである。しかしながらそこに生きている主人公の生涯には大きな変化はないので、あらずじはほとんど前の作品を踏襲することになるのである。

結 論

今回は、マルグリット・ユルスナールの若い頃の作品『死に神が馬車を導く』のなかの「デューラー風に」とその作品が成長して生まれた『黒の過程』を比較検討してみた。作家の中には、作品の発表

と同時にその作品は自分の手を離れてしまうと考える人も多いが、岩崎力も指摘しているように、アナクロニクな作家であるユルスナールは¹⁶⁾作品の主人公と一生関わり続けるタイプの作家であるので、一度出版された作品でも加筆修正して再版することが多い。今回の二作品を見た限りでは、その方法がかなり成功していると思われる。主人公を自分の中で温め続けることにより——「若年の頃から作者が長い時間をかけてそれらの人物とつきあうことの利点」¹⁷⁾とユルスナールは言っているが——、作品はより深く緻密になっていくのである。

序章で触れたように、『姉アンナ…』や『流れる水のように』の中の「無名の男」と「美しい朝」もまた、『死に神が馬車を導く』の二つの章が発展して出来たものであるので、今回は詳しく触れることが出来なかったが、これからはこれらの作品も合わせて検討してゆきたい。

【注】

《テキスト》

Marguerite Yourcenar, *L'Œuvre au noir*, Œuvres romanesques, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1982.

Marguerite Yourcenar, *La mort conduit l'attelage*, Grasset, 1933.

『黒の過程』岩崎力訳、白水社、1981.

本文中に引用されているテキストは、すべてこの三冊のものである。また訳は、特別断りのないものは著者自身による。

- 1) この年代については、手元のテキストを参考にした。『黒の過程』の解説では1934年となっている。
- 2) *Anna, soror… est une œuvre de jeunesse, (…)* (*Postface, Anna, soror…*, p. 1023).
- 3) *La seconde nouvelle du présent recueil, (…)* qui, des années plus tôt sous sa forme inédite, s'était appelée Nathanaël. (*Postface, Un homme obscur*, p. 1032).
- 4) *Après l'abandon de ce «grand dessin» dont le résultat eût été un roman-océan plutôt qu'un roman-fleuve, les hasards de la vie allaient me dicter une œuvre tout autre, (…)*. (*Postface, Anna, soror…*, p. 1023).
- 5) *D'après Dürer avait été choisi à cause de l'illustre Melancholia, (…)* mais un lecteur d'esprit littéral me fit remarquer que l'histoire de Zénon était plus flamande qu'allemande. (*Note de l'auteur, L'Œuvre au noir*, p. 838).
- 6) *Pour leur donner une apparence au moins d'unité, j'avais choisi de les nommer respectivement D'après Dürer, D'après Greco et D'après Rembrandt, (…)* (*Postface, Anna, soror…*, p. 1023).
- 7) 当初は60ページ程の長さだったものに後に10ページ加筆された。
- 8) 「天使の集い」とは、旧弊な宗教がかつた儀式にかこつけて男女の交わりを聖なる行為とみなすもの。
- 9) ゼノンはブリュージュを離れて以来、セバスチアン・テウス Sébastien Théus と名乗って医師として働いていた。
- 10) 明治大学大学院紀要第29集の「マルグリット・ユルスナール『黒の過程』の手法とその効果」参照。
- 11) 『死に神が馬車を導く』の出版1934年から『黒の過程』の出版1968年をさす。
- 12)13) ユルスナールには、『目を見開いて』*Les yeux ouverts*, Centurion, 1980という作品があり、そのタイトルは『ハドリアヌス帝の回想』の最後の一行、*Tâchons d'entrer dans la mort les yeux ouverts…*からとられている。
- 14) *Mais l'auteur d'un livre a ses raisons d'être plus sévère que ses juges: (Note de l'auteur, L'Œuvre au noir*, p. 838).

- 15) Je tiens à parler plus longuement des quelques corrections apportées à ce texte, ne fût-ce que pour répondre d'avance à ceux qui croient que mon temps se passe, de façon maniaque, à tout refaire et à tout changer, ou encore au jugement trop rapide qui ferait d'Anna, soror... (….) (*Postface, Anna, soror...*, p. 1030).
- 16) この形容詞は、『黒の過程』の解説の中で岩崎力によって使われている。
- 17) J'ai exprimé ailleurs ce que je pense des avantages, du moins en ce qui me concerne, de ces longs rapports d'un auteur avec un personnage choisi ou imaginé dès l'adolescence, (….) (*Note de l'auteur, l'Œuvre au noir*, p. 839).